
夜明けの魔法使い - DeepDeepBrightness -

白熊猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜明けの魔法使い・DeepDeepBrightness・

【Nコード】

N8541H

【作者名】

白熊猫

【あらすじ】

魔法使いの女の人と平凡だった少年の物語。現代を舞台に二人は数多の自己矛盾に触れていく…

プロローグ

…空を仰ぐ。腰まである、黒く濡れたように美しい髪を持つ魔法使いと月を見る。

僕は…呟く。

「あの人は何がしたかったんだろう」

魔法使いは少し考えたかと思うとすぐに口を開いた。

「彼はね、『完全』を求めていたのよ」

「完全ですか？　完全って欠点がなく不足がない様子をさしますよね。それがどうして…その…」あんな行動に繋がったのか。

「ええ、あなたは正しいわ、優也。でもここでの完全とは『完全』という概念よ。」

僕がますます分からないという顔をする

「彼の追い求めた『完全』はね、全てがそろっているということなの。あらゆる概念を含んだ究極の一、それを手にして星の記憶に至ろうとしたのよ。」

「……」

僕は黙って話を聞く。

「でもそんなものはこの世には存在しない。完全であるということとは、完全でないという概念を含んでいない。」

「それは、生きているという概念は死んでいるという概念を含まないように。」

「存在するという概念は存在しないという概念を含まないように。――僕という概念は、それ以外という概念を含まないように。」

「彼は最後まで気付かなかった…そんな自己矛盾をおこしたものは存在できない…なんていう当たり前のことに」

魔法使いは月から目を離し、言葉を切った。

「さあ、帰りましょう。私たちには明日があるんだから」

振り返り、屈託のない笑顔で明るく言い放った彼女に僕は

「はい。帰りましょう、響子さん」

なんてかえして、彼女と一緒に歩き出す。

「おなかが減ったわ。帰ったらすぐに晩ご飯の支度をしてちょうだいね」と言われて僕は、そういえばそれもあったか、と内心苦笑しつつ

「はい、期待しててください」

そう、応えていた。

そうして僕たちは、一人の魔導師の終焉の地を後にした。

一章 胡蝶の夢 1/2

—He grieved—

——彼は嘆いた。人間とはなんと不確定なのか、と。その不確定さゆえになんと無意味なのか、と。

彼は気付かない。彼がもつとも無意味だと嘆いたものが何なのかということに。

——そして彼は決意した。

——長い年月が過ぎて、彼の志しはとても強固なものとなっていた。そして彼自身でも変えられないものとなり、彼は一つの概念となっていた：

朝、鳥のさえずりが聞こえ、カーテンのかかった窓から漏れる光は明るい。

爽やかな朝だなあ、などと思い、時計を見ると

「ろくじ：はん？」

まずい！ 自分としたことが一時間も寝坊してしまった。

僕はガバツとベッドから跳ね起きて、手抜きには見えないような手抜き料理のメニューを考えながら早足で厨房へと向かって行く。

見事に前言撤回しなければならぬ慌ただしい朝だった。

僕こと宮倉優也は館に住み込みで家政婦のようなことをしている。仕事の内容はと言うと、まず朝五時半に起床し朝食の下拵えをする。部屋を暖め、朝食を作り、ヌボーっと起きてくる屋敷の主に洗顔と歯磨きを促し、二人で朝食を食べた後、屋敷の掃除をして、昼食を

作り、食べた後に屋敷の主にお茶を出し、事務的な仕事をしたら今度は洗濯。そして夕食を作る。これが一日のサイクルである：はつきり言って忙しい。忙しいがちゃんとお給料は出てるし、僕の分の食費とかの生活費は屋敷の維持費の内に入っているの、割りの良い仕事なんだと思う。

そして今は朝食を食べ終わったところで午前中の数少ない休みの時間だ。

そして、今僕の前でずずとお茶を飲んでいる人が屋敷の主である彼方かなた 響子さんきょうこだ。響子さんは髪が長くてスタイルも良いという女性らしいパーツを持っているのになぜだか男らしい：もとい強そうで豪快な印象を与え、実際にそのまんまな性格であるのだけど。そんな性格を表したように館の中ではシャツ一枚にジーパン、外出時でさえその上にジャケットを羽織るだけというラフさだ。そして今、そんな響子さんは獣のような目付きを僕に向けて

「一息ついたところで訊かせてもらおうかしら優也、今朝のご飯はどうして手抜きだったのかしら？」

と睨みつけながら言ってきた。：もろに手抜きがバレている。何故この人は料理なんてしないでくせに舌は肥えているのだろうか。

「あ：うう、その：寝坊しまして：」

すいませんと言うと、響子さんが

「しまして：じゃないわよ。せつかくおなががいい感じに減ったのにご飯がろくに喉を通らなかったじゃない！」

茶碗三杯も食べた人のセリフとは思えない：。さすがに本心は

語らずに

「はい。以後気をつけます」と応えていた。

響子さんは、まったくと言ってテレビのニュースに視線を移す。

ニュースではここ数週間話題になっている長期睡眠症候群について言っていた。長期睡眠症候群とは、発症者は初期の段階では夢遊病のような症状を示し、その後死んだように眠り続けてしまうとい

うものだ。

長期睡眠症候群になった人で目覚めた人は現在一人もいないらしい。それどころか発症した人は数日の間に本当に死んでしまうと言う

「三百五十三人…か。こんなに発症者がいるのに、いまだに原因が不明なんて、どうなってるんでしょうね？ 集団で発症するケースもあるみたいですし」

集団で異常な事態に陥るというのは自分の身に降りかかったものではないとしても、三ヶ月前の出来事を思い出してしまう。

ニユースでは心理学の教授という肩書きの人が、現実から逃避したいという願望から睡眠という行為に表れているのではと言っている、けれどそれでは死ぬ意味がわからないし、なにより発症者の生活には何の問題もなかったらしい。もちろん学校や職場での人間関係や、浮気や失恋などといった要素を除いてのことであるが。

「さあ、本当に精神病かもしれないし、新種のウィルスかもしれない。明確な答えは出せないわ」 響子さんの考えはたまに合理的だ。こういう時は大概仕事が見えであることが多い。というか仕事がからまないと信じられないほど大雑把になる。

「長期睡眠症候群になった人は通常の睡眠より多く夢を知覚している可能性が高いって…どういう夢を見てるんでしょうね？」

僕はたった今ニユースキャスターが言ったことを響子さんに聞いてみた。ちなみにニユースでは人間の睡眠にはSTEP1からSTEP4までのノンレム睡眠とレム睡眠の五つの段階に分けられ、ノンレム睡眠とレム睡眠はそのどちらでも夢を見るらしいが、夢として知覚されるのはレム睡眠のほうで、レム睡眠は通常、睡眠時間六〜八時間の間に一〜二時間ぐらい。長期睡眠症候群になった人は個人差があるにしても総じてレム睡眠のしめる割合が通常の三倍近くあると言っていた。どうもこれが精神病の説を裏付けているらしい。

「夢を見ている…か。ひょっとしたら私の出番になるかもしれないわね」 出番とはやはりそういうことなのだろう。この人は？魔法使い？なんていうものを生業にしていってその手の依頼をこなすのが

仕事だ。

「魔法：なんですか、この：長期睡眠症候群は？」

「さあ。魔法だとすると、魔術かしらね。魔導はあいての精神に干渉するものがほとんどないから。」

それを聞いて僕は質問したことは別の疑問をいただいた。

「魔術と魔導って何か違いがあるんですか？」

「ええ、簡単に言うと、魔術は術式っていう、わかりやすく言えば魔法陣みたいなものを魔力で発現させて自身の内や外に干渉するもので、魔導は回路という魔力を変質させる道を作り、魔力を導いて自身の外に干渉するのよ。前者は内にも外にも働くから万能型で後者は外にのみ働きかけるものだから使い方は限定されるけどそのぶん効果の強いものが多いの」

：よくわからないけど魔術と魔導が明確に区別されていることだけはわかった。

そんなことを話していたら電話がかかってきた。響子さんが電話に出て応対すること数分。電話を切ると

「ひょっとしたらが現実になったわ。長期睡眠症候群を発症させている魔術師がいるみたい。そいつを倒しに行くことになったの。今夜中にけりをつけるわ」

かけてあったジャケットの裾に腕を通しながらそう言った。

それに対して僕は

「そうですか。あの：夕ご飯、今朝の分も凝ったものを作りますから、気をつけて行ってください」

期待してるわと言って、響子さんは屋敷を出て行った。

一章 胡蝶の夢 2/2

家政婦のような少年を屋敷に置いて、人込みであふれた街に繰り出す。数週間もの間にたったの三百五十三人しか犠牲にできない程度の魔術師ならば少年の手を借りるまでもない。加えて神楽寄子との一戦から三ヶ月、かなり安定しているとはいえ彼の体はまだ彼の魂のなす魔術に耐えられるかどうか保証がない。今回の依頼が目標に出会ってしまえば戦いは避けられないということを踏まえて考えればあまり彼に無理をさせたくないかった。

響子は笑顔や無表情、怒気をはらませた表情や憂いをのぞかせる表情で彩られた街を探索する。自分一人で十分だと思ひ單身、敵の痕跡を探索すること数時間。

「：手伝ってもらえばよかったかしらね：」

現在三百五十三人しか被害が出てないということは、その分しか痕跡はないという簡単なことを都合よく忘れていた。

敵の情報たったの二つ。プルースト・アルデヒドという名前で、彼の魔術に囚われた者は夢遊病のときに、自分は蝶としきりにつぶやくということのみ。

手持ちの情報は少なく、今からでも少年を呼びつけて手伝わせようかと考えたところで疲れた表情をした背広の男が視界に入った。それだけなら珍しくもなかったのだが、しきりに何かつぶやいているようだった。

「三百五十四人目：かしらね」

？ 視る？ という事柄に集中すれば、やはり他人の魔力が介入している。

「後はあの男が引張ってきた魔術の痕跡をたどれば目的の奴に当たったりってとこね」

そう言って足早に痕跡をおって行く。

ほどなくして追いつく。

そして一つの終焉が星に記録されることになる。

気付いていたのか深緑のコートを着た魔術師は廃ビルの屋上へと歩みを進める。

「ここなら問題はないだろう。出てきてはいかがかな？　いつまでも人の後をつけるのはそちらもいい気分はしないのでは？」

もちろん私は気分が悪いと男は付け足した。

「それもそうね。まあ運良くあなたを見つけられたんだから、そう悪い気分でもないけど」

彼方響子という魔術師はいつもの調子で応える。

「運良く？　ああ、たしかに運が良い。私の魔術によって救済されようとしている者からの魔術の痕跡をたどって来たのだろうね。なんとという偶然、なんとという幸運！　君は私によって救済される。恐れることはない、死こそ唯一霊長を救う真の救済なのだから」

「偶然ねえ……。魔術師がそんな言葉を口にするものじゃないわ。だいたい、偶然は人間では観測できない神秘の法則の隠語よ。どちらが偶然に引き寄せられたか、必然としてその結果がどうなるかを、あなたは計り間違えているわ」

「さてそれはどうだろうね？　私は人々を救済しなければならぬ故、神秘の法則が私に牙を向けるなどとてもとても」

響子は露骨に面倒くさそうな顔をして

「一応確認してあげる、あなたがプルースト・アルデヒドで間違いないわよね」

その問いに、やはり魔術師は芝居掛かった大仰な返答をする。

「ああ、そのとおり。私がプルースト・アルデヒドで間違いない」

「そう、じゃあ早速で悪いけど死んでもらうわ。悪く思わないでね」

響子は思考を戦闘に切り替える。術式を発現させ魔術を行使する。だが、それは実行されなかった。

「貴女にも救済を、汝の心の底の望みを与えよう」

彼の？視線？が響子の意識に介入する。

「さあ夢見ることへの逃避を、死ぬことへの救済を享受するがよい。その権利が汝にはある」

——魔術が、発動する。

蝶になる夢を見る。いや蝶が私という夢を見ていたのか、私は蝶だった。蝶はただ浮遊するように翔んでいるだけ。ただその存在が果てるまで翔び続けるだけの仮初の永久機関。故にその存在に意味はなく、その命に意義はない。私だろうと蝶だろうとそれは同じことだ。

墜ちる。いつか墜ちる。意味なく墜ちる。必ず墜ちる。墜ちなければ。意味がないなら墜ちなければ。何よりこんなものに耐えられない。存在を放棄しなければならぬ。

墜ちる、墜ちなければ、墜ちたい墜ちたい墜ちたい墜ちたい墜ちたい墜ちたい……

「冗談っ」

全身に魔力を走らせ、深緑の魔術師にかけられた夢を跡形もなく碎く。

「なんだと！」

驚愕は深緑の魔術師のもの。

視線により相手の精神に介入し夢を見せ、あいての心そのものに結界を張る。長年の研究により得ることのできた魔術を自分の半分の歳月も過ごしていないであろう者に、あっさりと碎かれた。力差は歴然、しかし魔術師はここにきてもなお自身の運命を受け入れない。いや受け入れられなかった。受入れてしまえばすべてを否定されてしまうと直感したが故。

目の前には女性。表情はない。だがその瞳だけが殺意を放ってい

る。

自分に向けられる刃のような殺気を彼は受け取れきれない。死によって人類の救済を望んだ男は、現時点で生による自身の救済を望んでいた。

響子は独り言のように語りかける。

「自分が蝶なのか、蝶が自分なのか。そんな意味のない思考は胡蝶が疑問に思う前から、人々は解決してきたのよ。私たちは人という存在、蝶という存在、どちらが現実でどちらが夢なのか、自身の意志で決めることができるんだから」

——魔術師は認めない。

「それは詭弁だ！　だれもが心の底で自身に疑問を抱いている。そうでなくても自身になんの意味もないことに絶望を抱いている。それらを救済することが、私の使命だ！」

——魔術師は気付かない。自身に意味がないことに絶望し、救済という大義名分によって自分自身に無意味な意味付けをしていたことに。

そんな相手との問答には、それこそ意味はないと少し遅れて気づき、もう一度思考を戦闘に切り替える。

彼も相手に問答の意志はないことを悟ると。戦闘用の魔術の行使にはいる。こうなっては魔術戦を演じる他はなく、相手も同じであろうことを思考したためである。しかし二度目の驚愕が彼を襲う。

響子は魔術師の懐に潜り込んでいた。踏み込んだ速度は疾風のそれであり、懐に潜り込むまでの間に術式を発現させ魔術を行使していた。光を纏った拳で掬い上げるようなボディブローを魔術師の腹部に穿つ。形容しようのない炸裂音がする。鉄が内側から破裂する。とこういう音になるのかもしれない。

彼方の家に伝わる魔術。物質という殻を持つものが触れた瞬間に原子レベルで分解する破壊という概念を形にした魔術。

——存在しているのなら、物体だろうが霊体だろうが破壊する——

魔術師の存在が霧散する。原子レベルで分解された魔術師は苦悶の声も上げられず、雫一滴分の痕跡も残さずに消えていった。

響子は踵を返しその場を立ち去る。意味のない男の終焉の地であるそこは。死体すら残さなかったその男と同様に、意味などないのだから。

少なくとも響子にとっては

「お腹が減っちゃったわね。早く帰って優也が作ったご飯が食べたいなあ」

少年の用意した夕食のほうかはるかに意味を持っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8541h/>

夜明けの魔法使い - DeepDeepBrightness -

2010年10月10日02時35分発行